

第1章 いじめ防止に関する本校の考え方

1 基本理念

いじめは、その子どもの将来にわたって内面を深く傷つけるものであり、子どもの健全な成長に影響を及ぼす、まさに人権に関わる重大な問題である。全教職員が、いじめはもちろん、いじめをはやし立てたり、傍観したりする行為も絶対に許さない姿勢で、どんな些細なことでも必ず親身になって相談に応じることが大切である。そのことが、いじめ事象の発生・深刻化を防ぎ、いじめを許さない児童生徒の意識を育成することになる。

そのためには、学校として教育活動の全てにおいて生命や人権を大切にする精神を貫くことや、教職員自身が、児童生徒を一人ひとり多様な個性を持つかけがえのない存在として尊重し、児童生徒の人格のすこやかな発達を支援するという児童生徒観、指導観に立ち指導を徹底することが重要となる。

本校では、「豊かな心と確かな学力を培い、たくましく生きる子どもの育成」を教育目標としており、そのために人権教育に重点をおいて取り組んでいる。いじめは重大な人権侵害事象であるという認識のもとに、ここに学校いじめ防止基本方針を定める。

2 いじめの定義

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等、当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

具体的ないじめの態様は、以下のようなものがある。

- 冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
- 仲間はずれ、集団による無視をされる
- 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする
- ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする
- 金品をたかられる
- 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる 等

3 いじめ防止のための組織

(1) 名称

「いじめ防止委員会」

(2) 構成員

校長、教頭、首席、指導教諭、教務主任、生活指導部代表、人権教育推進部代表、各学年主任、養護教諭、(S C) (S S W) (学校長が認めた者)

(3) 役割

- ア 学校いじめ防止基本方針の策定
- イ いじめの未然防止
- ウ いじめの対応
- エ 教職員の資質向上のための校内研修
- オ 年間計画の企画と実施
- カ 年間計画進捗のチェック
- キ 各取組の有効性の検証
- ク 学校いじめ防止基本方針の見直し

4 年間計画

本基本方針に沿って、以下のとおり実施する。

柏原市立国分小学校 いじめ防止年間計画				
	低学年（１・２年）	中学年（３・４年）	高学年（５・６年）	学校全体
年間を通じて	帰りの会（友達の良い所や嬉しかったこと） 席替え 係活動や班の仕事	朝の会 帰りの会 トイレそうじ（４年）	班活動 （班目標・個人目標・振り返りで互いに認め合い支え合う） 自主学習ノート （ノート名人）	朝の会 終わりの会
1学期	4月：学級開き 家庭訪問 1年生をむかえよう（２年）	4月：学級開き ソーシャルスキル① （あいさつ・自己紹介・上手な聞き方） 家庭訪問	4月：学級開き 家庭訪問 異学年交流 （1年生のお手伝い）	4月：学級開き 家庭訪問 異学年交流 第1回いじめ防止委員会発足 （今年度の方針・計画）
	5月：学級懇談 校外学習 （コミュニケーション能力の育成）	5月：学級懇談 異学年交流 校外学習 たんぼぼ交流（３年）	5月：学級懇談 校外学習（班活動） たんぼぼ交流（６年）	5月：校外学習 異学年交流
	6月：プール指導 第1回アンケート実施 （思いや悩み、交友関係の把握）	6月：チクチク言葉とポカボカ言葉 第1回アンケート実施	6月：異学年交流 第1回アンケート実施	6月：異学年交流
	7月： ありがとうを伝えよう 個人懇談	7月： 学校での過ごし方・約束 （学年集会） 個人懇談	7月： いじめ撲滅運動 （児童会） 個人懇談 臨海学舎（５年）	7月：個人懇談 第2回いじめ防止委員会（いじめアンケート等検討）

2 学期	9月：運動会の取り組み 学級懇談	9月：運動会の取り組み 学級懇談 ソーシャルスキル② (自分の良い所。相手の気持ち を理解した働きかけ) 手と心で読む(4年) (障がい者理解) たんぼぼ交流(4年)	9月：運動会の取り組み 学級懇談 たんぼぼ交流(5年)	9月：学級懇談
	10月：運動会 人権学習 第2回いじめアンケート どんなかんじかな？ (障がい者理解) 校外学習 たんぼぼ交流	10月：運動会 第2回いじめアンケート	10月：運動会 修学旅行(6年) 第2回いじめアンケート	10月：運動会 校外学習
	11月：なわとび集会 作品展 平和を考える日 ワイワイワールド 異学年交流 さっちゃんのみほうの手 (障がい者理解)	11月：なわとび集会 作品展 平和を考える日 ワイワイワールド 異学年交流	11月：なわとび集会 作品展 平和を考える日 ワイワイワールド 異学年交流	11月：なわとび集会 作品展 平和を考える日 ワイワイワールド 異学年交流
	12月：個人懇談	12月：個人懇談 アイマスク体験(3年) (障がい者理解)	12月：個人懇談	12月：個人懇談 第3回いじめ防止委 員会(アンケートの検 討)
3 学期	1月： よかったよカード (音読発表会などで良か った点を書いてわたす) 手や指で話そう (障がい者理解)	1月：自分をふり返り、目標 設定。 盲導犬(4年) (障がい者理解)	1月：卒業遠足(6年) 自分達の街を見つめよう (障がい者理解)	1月：今年の目標
	2月：学習発表会 学級懇談会 第3回いじめアンケート	2月：学習発表会 第3回いじめアンケート	2月：学習発表会 クラブ発表会 第3回いじめアンケート 車いす体験 (障がい者理解)	2月：学習発表会 クラブ発表会
	3月：お楽しみ会 できるようになった所を 見つけあう 6年生を送る会	3月：お楽しみ会 6年生を送る会	3月：6年生を送る会 卒業式	3月：6年生を送る会 卒業式 第4回いじめ防止委 員会(年間の取組みの 検証等)

5 取組状況の把握と検証(PDCA)

いじめ防止委員会は、年度初めと各学期の終わりに(計年4回)、検討会議を開催し、取組みが計画どおりに進んでいるか、いじめの対処がうまくいかなかったケースの検証、必要に応じた学校基本方針や計画の見直しなどを行う。また、必要に応じて臨時に会を開く。

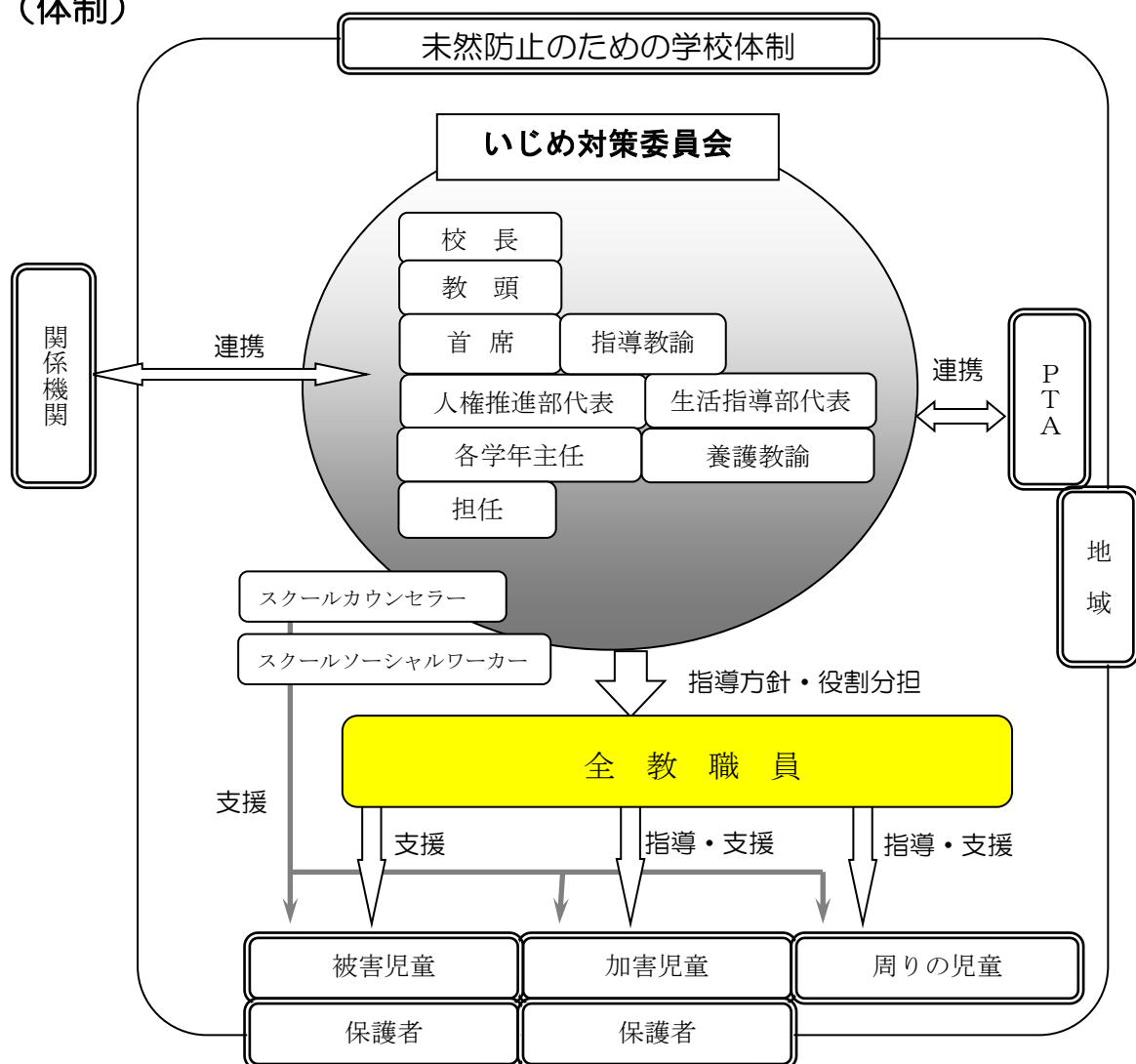
第2章 いじめ防止

1 基本的な考え方

いじめの未然防止にあたっては、教育・学習の場である学校・学級自体が、人権尊重が徹底し、人権尊重の精神がみなぎっている環境であることが求められる。そのことを基盤として、人権に関する知的理解及び人権感覚を育む学習活動を各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間のそれぞれの特質に応じ、総合的に推進する必要がある。

特に、児童が、他者の痛みや感情を共感的に受容するための想像力や感受性を身につけ、対等で豊かな人間関係を築くための具体的なプログラムを作成する必要がある。そして、その取組みの中で、当事者同士の信頼ある人間関係づくりや人権を尊重した集団としての質を高めていくことが必要である。

(体制)



2 いじめの防止のための措置

- (1) 平素からいじめについての共通理解を図るため、教職員に対して指導し、情報を共有する。

児童に対しては、人権教育の観点から集団づくりを行うと共に、いじめを許さない基盤をつくる。

- (2) いじめに向かわない態度・能力を育成するために、自他の存在を認め合い、尊重し合える態度を養うことや、児童が円滑に他者とコミュニケーションを図る能力を育てることが必要である。

そのために授業、行事に取り組み、自己有用感を育成する。

- (3) いじめが生まれる背景を踏まえ、指導上の注意としては、人権感覚育成に取り組む。

分かりやすい授業づくりを進めるために教員相互の授業力アップのための研修を行う。

児童一人一人が活躍できる集団づくりを進めるために、授業を基本としつつ、委員会活動や児童会活動に積極的に取り組む。

ストレスに適切に対処できる力を育むために、自己有用感を育てる仲間づくりに取り組む。

いじめを助長するような教職員の不適切な認識や言動等、指導の在り方に注意を払い、教職員が協働して教育活動を行う。

- (4) 自己有用感や自己肯定感を育む取組みを、第1章4の年間計画に基づいて実施する。

- (5) 児童が自らいじめについて学び、取り組むように、教師主体の授業はもちろん、児童会活動においても啓発する。

第3章 早期発見

1 基本的な考え方

いじめの特性として、いじめにあっている児童がいじめを認めることを恥ずかしいと考えたり、いじめの拡大を恐れたりするあまり訴えることができないことが多い。また、自分の思いをうまく伝えたり、訴えたりすることが難しいなどの状況にある児童が、いじめにあっている場合は、隠匿性が高くなり、いじめが長期化、深刻化することがある。

それゆえ、教職員には、何気ない言動の中に心の訴えを感じ取る鋭い感性、隠れているいじめの構図に気づく深い洞察力、よりよい集団にしていこうとする熱い行動力が求められている。

2 いじめの早期発見のための措置

- (1) 実態把握の方法として、定期的なアンケートは年3回実施する。

定期的な教育相談としては、個人懇談や放課後指導を活用すると共に、スクールカウンセラーの活用など外部組織との連携も図る。日常の観察として、児童の生活を観察すると共に、日記指導、学級会活動、作文指導を活用する。

- (2) 保護者と連携して児童を見守るために、学級・学年通信、参観後の懇談会、個人懇談会などを積極的に活用すると共に、家庭訪問、電話での連絡・情報交換を緊密に行う。
- (3) 児童、その保護者、教職員が、抵抗なくいじめに関して相談できる体制をつくり、相互に情報を交換する。また、スクールカウンセラーなど外部組織と積極的に連携する。
- (4) 学校便り、ホームページ等により、相談体制を広く周知する。
いじめ防止委員会の定期開催により、適切に機能しているかなど、定期的に体制を点検する。
- (5) 教育相談等で得た児童の個人情報については、その対外的な取扱いについて守秘義務を守ると共に、必要な連携のために対策を講じる。

第4章 いじめに対する考え方

1 基本的な考え方

いじめにあった児童のケアが最も重要であるのは当然であるが、いじめ行為に及んだ児童の原因・背景を把握し指導に当たることが、再発防止に大切なことである。近年の事象を見ると、いじめた児童自身が深刻な課題を有している場合が多く、相手の痛みを感じたり、行為の悪質さを自覚したりすることが困難な状況にある場合がある。よって、いじめた当事者が自分の行為の重大さを認識し、心から悔い、相手に謝罪する気持ちに至るような継続的な指導が必要である。いじめを受けた当事者は、仲間からの励ましや教職員や保護者等の支援、そして何より相手の自己変革する姿に、人間的信頼回復のきっかけをつかむことができると考える。

そのような、事象に関係した児童同士が、豊かな人間関係の再構築をする営みを通じて、事象の教訓化を行い教育課題へと高めることが大切である。

2 いじめ発見・通報を受けたときの対応

- (1) いじめの疑いがある場合、ささいな兆候であっても、いじめの疑いがある行為には、早い段階から的確に関わる。

遊びや悪ふざけなど、いじめと疑われる行為を発見した場合、その場でその行為を止めたり、児童や保護者から「いじめではないか」との相談や訴えがあった場合には、真摯に傾聴する。

その際、いじめられた児童やいじめを知らせてきた児童の安全を確保するよう配慮する。

- (2) 教職員は一人で抱え込まず、速やかに学年主任や生活指導部（分掌長等）に報告し、いじめの防止等の対策のための組織「いじめ対策委員会」と情報を共有する。その後は、当該組織が中心となって、速やかに関係児童から事情を聴き取るなどして、いじめの事実の有無の確認を行う。

- (3) 事実確認の結果、いじめが認知された場合、管理職が教育委員会に報告し、相談する。
- (4) 被害・加害の保護者への連絡については、家庭訪問等により直接会って、より丁寧に行う。
- (5) いじめが犯罪行為として取り扱われるべきものと認められるときは、いじめられている児童を徹底して守り通すという観点から、所轄警察署と相談し、対応方針を検討する。
なお、児童の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに所轄警察署に通報し、適切に援助を求める。

3 いじめられた児童又はその保護者への支援

いじめた児童の別室指導や出席停止などにより、いじめられた児童が落ち着いて教育を受けられる環境を確保し、いじめられた児童に寄り添い支える体制をつくる。その際、いじめられた児童にとって信頼できる人（親しい友人や教職員、家族、地域の人等）と連携し、いじめ対策委員会が中心となって対応する。状況に応じて、スクールカウンセラーの協力を得て対応を行う。

4 いじめた児童への指導又はその保護者への助言

- (1) 速やかにいじめを止めさせた上で、いじめたとされる児童からも事実関係の聴取を行う。
いじめに関わったとされる児童からの聴取にあたっては、個別に行うなどの配慮をする。
- (2) 事実関係を聴取した後は、迅速にいじめた児童の保護者と連携し、協力を求めるとともに、継続的な助言を行う。
- (3) いじめた児童への指導にあたっては、いじめは人格を傷つけ、生命、身体又は財産を脅かす行為であることを理解させ、自らの行為の責任を自覚させる。なお、いじめた児童が抱える問題など、いじめの背景にも目を向け、当該児童の安心・安全、健全な人格の発達に配慮する。
その指導にあたり、学校は、複数の教職員が連携し、必要に応じてスクールカウンセラーの協力を得て、組織的にいじめをやめさせ、その再発を防止する措置をとる。

5 いじめが起きた集団への働きかけ

- (1) いじめを見ていたり、同調していたりした児童に対しても、自分の問題として捉えさせる。
そのため、まず、いじめに関わった児童に対しては、正確に事実を確認するとともに、いじめを受けた者の立場になって、そのつらさや悔しさについて考えさせ、相手の心の悩みへの共感性を育てることを通じて、行動の変容につなげる。
また、同調していたりはやし立てたりしていた「観衆」、見て見ぬふりをしていた「傍観者」として行動していた児童に対しても、そうした行為がいじめを受けている児童にとっては、いじめによる苦痛だけでなく、孤独感・孤立感を強める存在であることを理解させるようにする。
「観衆」や「傍観者」の児童は、いつ自分が被害を受けるかもしれないという不安を持

っていることが考えられることから、すべての教職員が「いじめは絶対に許さない」「いじめを見聞きしたら、必ず先生に知らせることがいじめをなくすことにつながる」ということを児童に徹底して伝える。

- (2) いじめが認知された際、被害・加害の児童たちだけの問題とせず、学校の課題として解決を図る。全ての児童が、互いを尊重し、認め合う集団づくりを進めるため、担任が中心となって児童一人ひとりの大切さを自覚して学級経営するとともに、すべての教職員が支援し、児童が他者と関わる中で、自らのよさを発揮しながら学校生活を安心してすごせるよう努める。

そのため、認知されたいじめ事象について地域や家庭等の背景を理解し、学校における人権教育の課題とつなげることにより教訓化するとともに、いじめに関わった児童の指導を通して、その背景や課題を分析し、これまでの児童への対応のあり方を見直す。その上で、人権尊重の観点に立ち、授業や学級活動を活用し、児童のエンパワメントを図る。その際、スクールカウンセラーとも連携する。

運動会や校外学習等は児童が、人間関係づくりを学ぶ絶好の機会ととらえ、児童が、意見が異なる他者とも良好な人間関係を作っていくことができるよう適切に支援する。

6 ネット上のいじめへの対応

- (1) ネット上の不適切な書き込み等があった場合、まず学校として、問題の箇所を確認し、その箇所を印刷・保存するとともに、いじめ対策委員会において対応を協議し、関係児童からの聞き取り等の調査、児童が被害にあった場合のケア等必要な措置を講ずる。
- (2) 書き込みへの対応については、削除要請等、被害にあった児童の意向を尊重するとともに、当該児童・保護者の精神的ケアに努める。また、書き込みの削除や書き込んだ者への対応については、必要に応じて、大阪法務局人権擁護部や所轄警察署等、外部機関と連携して対応する。
- (3) また、情報モラル教育を進めるため、総合的な学習の時間等において、「情報の受け手」として必要な基本的技能の学習や「情報の発信者」として必要な知識・能力を学習する機会を設ける。